

- [分 類] 普及技術
 [成果名] すもものアブラムシ類防除にバリアード顆粒水和剤が有効である
 [要 約] すもものアブラムシ類防除にバリアード顆粒水和剤 4,000 倍液を散布する。蚕毒が強いので、桑園付近では使用しない。
 [担 当] 果樹試験場 環境部
 [部 会] 病虫部会

1 背景・ねらい

すもものアブラムシ類防除薬剤を充実するため、収穫前日まで使用できるバリアード顆粒水和剤の実用性を検討したところ有効性が認められたため、今回普及技術とした。

2 成果の内容・特徴

(1) すもものアブラムシ類防除にバリアード顆粒水和剤の 4,000 倍液を散布する。

農薬登録内容

バリアード顆粒水和剤

[一般名及び成分含量] チアクロプリド 30%

[毒性] 人畜毒性：劇物 [魚毒性] A 類

[対象作物に対する適用登録状況（平成 21 年 9 月 25 日現在 JPP ネット確認）]

作物名	適用害虫名	希釈 倍数	使用時期	本剤及びチアクロプリド を含む総使用回数	使用液量	使用 方法
すもも	アブラムシ類 モモアカアブラムシ	4,000倍	収穫前日 まで	2回以内	200～700 リットル/10a	散布

3 利用上の留意点

- (1) 本剤はネオニコチノイド系殺虫剤である。優れた浸透移行性と残効性を併せもつ。
- (2) 蚕毒が強いので、桑にかからないよう桑園付近では使用しない。
- (3) 「太陽」「ソルダム」など、品種によっては葉に極軽い薬害（穴あき症状）が生じることがある。
- (4) すももでのアブラムシ類の重要な防除時期は 4 月～5 月上旬である。
- (5) 本剤はミツバチ、マルハナバチに対する影響は比較的少ないが、マメコバチには影響があるので注意する。
- (6) アブラムシ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、年 1 回の散布とし、他剤とローテーションで使用する。

4 対象範囲 県下全域

5 具体的データ

- (1) 平成 17 年の試験では、バリアード顆粒水和剤はモモアカアブラムシに対し、高い防除効果が認められた（表 1）。すももに対する薬害は見られなかった。

(2) 平成 21 年度の試験でも、バリアード顆粒水和剤はウメコブアブラムシに対し、高い防除効果が認められた(表 2)。すももに対する薬害は見られなかった。

表 1 すもものモモアカアブラムシに対するバリアード顆粒水和剤の防除効果
(平成 17 年、果樹試験場)

供試薬剤	希釈 倍数	1 新梢当たり無翅虫数				薬害
		散布前	2 日後	5 日後	11 日後	
バリアード顆粒水和剤	4,000	33.3	1.4	0.0	0.8	無
無 散 布	-	24.2	39.9	65.7	277.5	

試験場所：果樹試験場内ほ場 品種：「大石早生」 区制：1 区 1 樹 3 反復
発生状況：中発生
薬剤散布：5 月 9 日に動力噴霧器を用い 1 樹当たり 30 リットルを散布した。展着剤はアグラ
ー 5,000 倍を加用した。他の殺虫剤は使用しなかった。殺菌剤は慣行による。
調査方法：1 樹当たり 5 新梢にラベルを付け、散布前(5/9)、散布 2 日後(5/11)、5
日後(5/14)および 11 日後(5/20)にその新梢に寄生する無翅虫数を調査し
た。

表 2 すもものウメコブアブラムシに対するバリアード顆粒水和剤の防除効果
(平成 21 年、果樹試験場)

供 試 薬 剤	希釈 倍数	1 新梢当たり無翅虫数					薬害
		散布前	3 日後	7 日後	14 日後	21 日後	
バリアード顆粒水和剤	4,000	65.4	0.0	0.0	0.5	0.7	無
無 散 布	-	48.8	158.5	183.7	54.9	17.4	

試験場所：果樹試験場内ほ場 品種：「貴陽」 区制：1 区 1 樹 2 反復
発生状況：中発生
薬剤散布：5 月 19 日に動力噴霧器を用い 1 樹当たり 30 リットルを散布した。展着剤はマイ
リノー 10,000 倍を加用した。他の殺虫剤は使用しなかった。殺菌剤は慣行に
よる。
調査方法：1 樹当たり 10 新梢にラベルを付け、散布当日(5/19)、散布 3 日後(5/22)、
7 日後(5/26)、14 日後(6/2)および 21 日後(6/9)にその新梢に寄生する無
翅虫数を調査した。

6 特記事項

[公 開] 制限なし。

[課題名、研究期間、予算区分]

果樹の病害虫に関する素材開発研究(特異発生害虫の生態解明と防除方法確立)、平成 17、
21 年度(2005、2009 年度)、県単素材開発